
マール

佐久間 芽衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マール

【Nコード】

N7261F

【作者名】

佐久間 芽衣

【あらすじ】

贅沢な暮らしなんていらぬ。ふつうの幸せがあればいい。幼少の頃から孤独に生きてきた祥子は誰よりも平凡で堅実な生活を望んでいた。しかし スピリチュアルな世界に生きる会社の同僚、篠山凜との出会いにより、祥子の人生は大きく狂わされることとなる。形のないものに心を奪われてゆく者達の心理とは

第一話： エメジー（前書き）

これはスピリチュアルを完全否定している物語ではないことを前提としていきます。

第一話： エメジー

「カチツ」

という音と共に祥子は強烈な睡魔から意識を取り戻した。

短針と長針と秒針が重なり合う音だった。連日の深酒により身体も頭も睡眠を欲しているのだろうか。朝9時に会社へ出勤してから何度も夢と現実の世界を漂っている。

都内にある保険会社の営業事務をしている末永祥子は、やっと仕事にも慣れ始めた頃であった。完璧主義で弱みを見せるのが嫌いな祥子が二日酔いになる程酒を煽るのは珍しいことだった。しかし最近の祥子は違っていた。

「もう12時」

パソコンを打つ手を休め、頭の奥で鈍い痛みを感じながら、祥子は昨晚の恋人とのやり取りを思い出していた。

「お前はつまらないことしか言わないんだな」

その言葉が祥子の頭をかけ巡った。更に鈍い痛みが襲う。前髪をかきあげるようにおでこを指掌で覆った。

そもそも喧嘩の発端は何だったんだろうか。そんなことはどうでもいい。敦史はいつからそんな無神経なことを口走るようになってしまったのだろうか。もう私のことを愛してはいないのだろうか。私のことをつまらない女だと、そう思っているのだろうか。そんな考えばかりが堂堂巡りをし、仕事が手につかないような日々が続いていたのだ。

「祥ちゃん、もし良かったらエメジー飲む？少し顔色が悪いから」
話かけてきたのは同期の篠山凜だった。

整端な顔立ちに清楚な印象であり、飾らない柔和な雰囲気であるため入社時には男性社員の注目を浴びていた。

「平気」それだけ言うと祥子はするりと席を立った。篠山はいつも具合が悪い時、上司に叱責られたり悩んでいる時などに心配を装って近づいてくるのだ。

祥子は彼女が嫌いだった。嫌いなのは彼女が美人で嫉妬しているからではなく、偽善者だからというわけでもなかった。

確かに彼女は祥子にはない美貌の持ち主であったが、祥子は昔からよくもてていたし、見た目だって決して悪くはなかった。色白で瞳が大きく黒目がちであり、肩まで伸びる艶のある黒髪が似合う品の良い顔立ちをしていた。

それに人より華やかでありたい、目立ちたいというようなタイプではなかった。正確にいうと、目立つことを恐れていた。人一倍保守的な性格なためか、普通でいることが楽であったのだ。列からはみださないで生きることを常に意識していた。それは祥子の傷つきやすく、繊細な性格がそうさせたのだろう。

「エメジーね」

祥子は誰もいない給湯室内にある机にもたれ、小さく呟いてから薄ら笑いを浮かべた。篠山が勧めてきたエメジーとは金平糖のような形をした小さな飴のことだった。今日のように何かしら気分が沈んでいる時に彼女はこの飴を勧めてくるのだ。

当初はただの変わり者だと思っていた。仕事は几帳面で、ミスが少なくやや神経質すぎる印象はあったが、自分が仕事を覚えることに必死だった当時は気にも止めなかった。

彼女に対する印象が決定的に変わったのは、入社してから一年後のことだった。新入生歓迎会での席で隣り合わせになり、酒に酔った彼女が自分の悩みを打ち明けた時であった。彼女の悩みというのは、仕事の悩みや人間関係といった類のものではなく、幼少期に負ったイジメや母親に疎外されてきた心の痛み、トラウマといった内容がほとんどだった。

彼女の家は共働きらしく、父親は貿易関係の仕事をしていて海外勤務が多いため家に帰ることは少なく、母親はマダム向け雑誌のモデルをしていると話した。

「篠山勢津子っていうんだけど知ってる？」

祥子は正直驚いた。芸能関係や流行りにそこまで敏感なほうでは決してなかったが、そんな祥子でも聞いたことがある名前だった。「50歳手前だつていうのにすごく綺麗な人じゃない。まさか凜ちゃんのお母さんだったなんて」篠山勢津子とは一部の中年の間で憧れの存在でもある女性だ。ついこの間、ニュースの「熟女の魅力」というテーマの特番で紹介されてたので祥子の記憶にも新しくなった。

有名人の母を持つ同僚と職場が同じである事実には浮かれ、高揚した祥子は更に話を聞こうと身を乗り出した。しかし、彼女の口から出る言葉は否定かつ衝撃的なものだった。

「母は私が嫌いな。邪魔なんだと思う。いつも弟ばかり可愛がってたし。私が女だから駄目なんだと思う」彼女は虚ろな目で呟いた。「女だから？」翔子は思わず不審な目で凜を見た。「母は私を敵視

しているの。過去世で色々あつて。私が男で生まれてこればよかつたんだけど、父をまた奪われると思つているのよ。母が私を疎外するのも当然なの。イジメに遭つてきたのも運命だと思う」

祥子は目を丸くした。この人は正気でそんなことを言っているのだろうか。いや、真剣なのはその表情を見ると明らかだった。気になつたのがそれを話す凜の口調である。妙にいたずらっぽく、子供じみた風なのだ。

すると凜は徐にカバンの中から小さな飴を取り出し口に放り込み、水で流し込んだ。「これはね、怒りや苦しみから開放してくれるんだ。ハートを開いてくれるんだよ」彼女はそう言い放ち、小瓶に入つた砂糖の塊を愛おしそうに眺めた。そして、カバンから取り出した大判のハンカチに丁寧にそれを包み、カバンに戻した。それが『エメディー』であつた。

この類か。

祥子は何にでも分類してしまふ癖があつた。分類することで、あらゆる理解できないものに対し不安感を取り払おうとした。動揺している自分が嫌いなのだ。祥子はあやふやな物事が嫌いであつた。凜がスピリチュアルというものにどっぷりと浸かっている人間なのだろうということは明白だった。人との摩擦をできるだけ避けて祥子でも、この手の話は曖昧な相槌を打ちながら笑つて聞くのが精一杯だった。しかし、この瞬間から凜は軽蔑に値する存在となつたのだ。

第2話：祥子の過去

シンとした給湯室で苦い記憶を思い出した祥子はめ息が漏れた。

そもそもスピリチュアルという言葉もいかにも曖昧で嫌いだ。だいたいどこまでがスピリチュアルなのだろう。そもそもどうして凛はそっちの世界に興味を持ったのだろう。こんなにも恵まれた容姿を持ち、恵まれた家庭環境に育ち、何が不満だったのである。祥子は自分の境遇と重ね合わせ、苛立ちを紛らわせるかのように腰掛けていた机を指で規則的にコツコツと鳴らせた。

彼女の幼少期に受けたいじめなど祥子にしたら取るに足りないものだった。祥子は父子家庭で育った。男癖の悪い母親に愛想を尽かせた父親と二人きりだった。経済面ではそこまでの苦労はなかったが、父親の転勤のため2回も転校を余儀なくされた。1度目は小学校3年生の時だった。人見知りの激しかった祥子はなかなか同級生と馴染めず、いつもトイレの個室に籠っては泣いていた。

2度目の転校 それは祥子にとって一番つらい思い出だった。中学2年生の思春期真っ只中での転校だった。素直で傷つきやすく繊細であった祥子にとってそれは薄暗く、残酷な記憶として残っている。思い出すのも憚るほどに祥子の人生に打撃を与えたのだ。

こんなとき、母親がいれば少しは違ったのだろうか。いや、あんな母親きつとこないほうがマシだった。父親である三郎はというと仕事で忙しく、ましてや祥子のメンタルな部分にまでには気がまわらなかった。それでも父親が唯一無二の味方であり、大切であった。

「祥子がいるから父さんはまだまだ頑張れるな」といつも口癖のように言っていた。祥子をいつも安心させようとしてくれた。

父にまで見放されていたら私はどうなっていただろうか。ぐれて煙草やシンナーを吸い、不良とつるみ、ろくでもない男との子供でも身籠って四苦八苦していたのだろうか。それとも凜のように救いを求めて得たいの知れない宗教団体にでも加盟していたのだろうか。きっとそれはない。祥子は繊細で気が弱いところはあるけれど、芯はしっかりしていると自負していた。

ああ、だめだ。祥子は心の中で思った。これ以上は思い出さない。もうあの頃の弱虫な私ではないのだ。ちゃんと4年制大学まで卒業し、少ないが友達にも恵まれ、この不景気に大手の企業に就職することだって出来た。そうだ、恋人の敦史だっている。最近態度は冷たくなってきているけれど、3年間も愛を育んでこれたのだ。

今まではツキに見放されていたかもしれない。でもこれからは違う。贅沢は言わない。金持ちになれなかった方がいい。「なにがトラウマよ。疎外よ」祥子は呟いた。私はそんなものに惑わされない。「あんな砂糖の塊をいくら舐めたって痛みなんて減らない。幸せになんてなれない。血糖値が少しあがるだけよ」

そう独り言をつぶやくと、雑念を振り払うかのように大きく手をついて祥子は立ち上がった。すると同時に給湯室のカーテンが開き、後輩の高倉冴子がひよっこり現れた。「先輩、ここにいたんですね。一緒にランチしませんか」

冴子は愛くるしい顔をくしゃくしゃにして微笑んでいる。彼女は祥子が一番信頼している2年後輩の社員だった。小柄な体をしていて丸顔であり、まつ毛の長い大きな目をしている。小さな鼻に口角がキュツと上がっていて、わかりやすく人から好かれそうな顔つきをしていた。特に笑ったときは下瞼がぶつくりと膨れ、それが目尻の

皺を作り、なんともいえず愛嬌のある表情をする。初めて冴子を見たとき、祥子は「敵を作らないタイプだ」と心の中で思った印象がある。

入社当初から何故か祥子になついでいて、祥子もそれを嬉しく思っていた。なんとも気楽に見える雰囲気とは裏腹に仕事に関しては真面目であり、彼女の持つ独特の柔らかい空気は癒しすら感じる程であった。

「そうだね。今日社員食堂でいいか」と言つて二人は給湯室を後にし、短い廊下を進んだ突き当たりにあるエレベーターのボタンを押した。そのまま社員食堂のある1Fまで降りた。

食堂はいつもよりすいていて、冴子はラッキーですねと喜び弾むような声を発し、テラス側にある日当たりのよい4名まで座れる席を陣取った。「何食べます？お腹ぺっこぺこだ。でも最近ダイエツトしてるからから揚げ定食はやめておこうかな」「先輩何食べます？先輩から揚げ定食にしてくださいよ。1個ください。なんちゃって。やっぱり今日もから揚げ定食にしちゃお」

隣で浮かれる冴子をよそに、祥子は他のことを考えていた。恋人の敦史のことだ。帰ったら電話をしよう。ちゃんと話し合いをして、仲直りをしなければ。昨夜のことをまた思い出していた。

そうか。事の原因は私のちよつとした嫉妬からはじまったのだ。敦史が4月に予定されている社員旅行の話をしてきた時だった。最近素っ気無い態度を見せていた敦史がいやに弾んだ声で祥子に話をしてきたのが気に入らなかつた。敦史と祥子は大学時代アルバイトをしている時に知り合い、大学卒業と共に交際を始めちよつと3年になるが、こんなに無邪気な様子で話しかける敦史は久しぶりだった。

「社員旅行つてあの子もいるんじゃないの」祥子はすねるような声で言った。あの子とは、敦史が祥子と付き合い始めてまだ間もない頃、敦史にアプローチをしてきた女の子である。名前は豊崎絵里といい、敦史の6つ後輩で短大卒業後就職をした20歳の新人社員だった。ちょうど祥子の3歳年下にあたる。当時敦史は、焼きもちをやく祥子を面白がって絵里の話をよくした。「絵里ちゃん俺のこと好きなんだって」とにやにや笑いながら言ったものだった。

しかし祥子はそれが嫌ではなかった。祥子のすねる顔を見て嬉しそうに笑う敦史の顔を見ると愛されていると実感できたし、なにより自分が敦史の唯一の彼女であるということを実感できた。今まで一人ぼっち同然で生きてきたような祥子にとって、敦史と過ごす時間は何にも変えがたいものだったのだ。

しかし、昨晚の敦史の態度は違った。「お前まだそんなこと言ってるのか。いつの話してんだよ」そのため息をつき、面倒くさそうな表情を浮かべ、煙草に火を点けたのだ。祥子はその態度に思わずかつとしたのだ。そして敦史の煙草を取り上げ灰皿に押し付けた。「面倒なの？私のこと」そう言って探るように目を見つめた。するとあの言葉が返ってきたのだ。

「お前はいつもつまらないことしか言わないんだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7261f/>

マーブル

2010年10月9日06時55分発行